

千明 守 提出 学位申請論文

『平家物語屋代本とその周辺』 審査要旨

論文の内容と要旨

本論文は、『平家物語』の多様な諸本のうち、語り本系に分類され、従来古態本との評価を受けてきた屋代本と、その屋代本から影響を受けて成立してきたと考えられる諸本の本文について、その成立過程を中心に考察したものである。

序章では、本書全体の理論的支柱となるテキストクリティークの方法論を確認するために、国文学研究における系譜法的研究法の歴史を確認し、その方法論の限界と可能性について考察している。

国文学の本文研究に系譜法の理論を導入しそれを実践した池田龜鑑氏の方法論

は、根本的な批判検証を受けることなく現在に至っている。池田理論に対する数少ない批判としてまず挙げられるのは小西甚一氏のそれであろう。小西氏は、池田氏の系譜理論を「科学的」であると認めた上で、しかし実際にそれを適用しうる条件が、日本文学の場合ほとんど整っていないとされた。そして系譜法は、十九世紀的「近代科学」に立脚したものであり、物理学や数学の分野においても十九世紀的「近代科学」は覆されたのだから、それを踏まえて理論構築されている系譜法が妥当でないのは自明のことであるとされた。

筆者は、池田理論の基盤となっている「共通異文」による祖本復元の方法の理論的欠陥を指摘し、そこに「不可逆性」という概念を持ち込まなければ祖本の姿の復元はできないこと、さらにその「不可逆性」に着目した祖本復元も極めて限定的部分的なものであることを、理論的モデルを使って論証した。

そして、池田理論が多くの日本文学作品に適用できないのはそこに理論的欠陥を含んでいるからであって、「近代科学」に立脚しているからではないこと、池

田理論の欠陥を修正し正しく適用すれば、わずかではあるが原本復元に資するところはあるということを経験として結論としている。

第一篇では、序章で展開した理論に基づき、『平家物語』諸本のうち「覚一系諸本周辺本文」と呼ばれる一群の諸本の本文がどのようにして成立してきたかという問題について考察する。

「覚一系諸本周辺本文」に分類される諸本（鎌倉本や平松家本など）は、従来古態本と評価されてきた屋代本と南北朝期に完成したと見られる覚一本との中間的本文を有している点から、屋代本から覚一本へと成長変化していく過渡的な形態を示す本文であると考えられてきた。しかし、実際の本文のありようを詳細に検討してみると、これら一群の諸本（覚一系諸本周辺本文）の本文は、屋代本と覚一本の過渡本であるとは到底考えられず、かなり後次的な要素を濃厚に有していることがわかる。

これを、単なる印象批判だけでなく、系譜法的理論を援用し、さまざまな観点

から、客観的科学的に論証を試みた。

第一章では、本文の近接度を統計学的に測定する方法を試みた山内潤三氏の論を検証し、その方法の限界について確認する。要するに、本文の近接度をどんなに客観的に測定しても、そのデータをもって「系譜関係」を証明することは全く不可能だということになる。

第二章から第五章では、具体的な本文を詳細に検討しながら、当該本文が「屋代本的本文と覚一本的本文を混態させて作られた」ものであることを論証する。

第二篇では、屋代本の本文について考察している。屋代本はこれまで、現存語り本系諸本中もつとも古態であるという評価を受けてきた。その主な論拠は、①現存本の書写年代が古いこと、②記事配列が他の諸本（特に覚一本）に比べて編年体的性格が強いこと、③本文が古朴で記録的であること、の三点に集約できる。

第一の論拠については、近年調査が進み、推定書写年代は従来よりも引き下げられる傾向にあり、屋代本古態論の絶対的根拠にはなり得なくなっている。

本篇では、主に第二の論拠について具体的に検証を試みている。まず、第一章では、現存屋代本の伝本（國學院本・京都府立総合資料館本・静嘉堂文庫本）について紹介し、現存本の性格について報告する。

第二章から第五章では、「小督」説話・「都落ち」話群・卷一「御輿振」・卷三「赦文」・卷十一本文について、屋代本と覚一本と延慶本の本文とを比較し、以下のような結論を得ている。

一、屋代本の「簡略性・編年性」という要素は、それが単純に屋代本の古態性に結びつくものではなく、屋代本の一つの指向性の現れにすぎないものである。

二、屋代本・覚一本の本文のその源には、延慶本に近い形態をもった未整理で雑多な本文の存在を想定することができる。

三、そのような祖本から、屋代本は屋代本の方法で、そして覚一本は覚一本の方法で、組み替え整理したものである。

四、ただそれは全く別個に行われたものではなく、屋代本と覚一本とは近いところで祖先を共有するだろう。

屋代本と覚一本の先後関係については、簡単に決着はつけられない。ただ、筆者の作業によって、従来のように屋代本の本文形態をアプリアリに古態と規定し、覚一本との本文比較から「文学の達成」を導き出すような論がその意味を失ったことはたしかである。

第三篇では、八坂系諸本の本文について考察する。

第一章では、平曲の流派と現存諸本の関係について論じている。従来の研究では、一方・八坂二流派の平曲と現存一方系・八坂系諸本の諸本が密接に対応すると考えられてきたが、一方系はともかく、八坂方の琵琶法師の平曲と八坂系諸本の間には密接な関係があるとはいえないことが論証された。

第二章・第三章では、八坂系諸本のうち、第一類本・第二類本・第五類本について、その本文の性格とその伝来について考察している。いずれの諸本も、屋代

本・覚一本・延慶本等の影響を受け、さらに後次的な編集の手が大幅に加えられていることを明らかにした。

それを受けて、第四章では、語り系諸本の本文がどのような目的と要因によって変化してきたと考えられるか考察する。いずれの諸本群においても、本文の変化は「机上の編集」によってもたらされたものと考えるべきであることを、具体的な本文の比較により論証した。

附篇では、これまで紹介されてこなかった國學院大學図書館蔵『平治物語絵巻常盤巻』を翻刻紹介し、現存諸本との校異を示している。諸本の本文を一覧化して研究に資するためである。

#### 論文審査の結果の要旨

申請論文『平家物語屋代本とその周辺』は、屋代本『平家物語』を中心として

語り本系『平家物語』の本文形成について考察したものである。

屋代本『平家物語』は、昭和三〇年代には古態本として注目された。渥美かをる氏らによって、『平家物語』の代表本文である覚一本と屋代本との間に、過渡的本文として、いわゆる「覚一系諸本周辺本文」(百二十句本・平松家本・鎌倉本・竹柏園本など)が据えられ、『平家物語』語り本系本文の成立過程の研究はそのまま定説を確立するかに見えたが、昭和四〇年代半ば以降、山下宏明氏がこれらの本文を覚一本の影響を受けて成立した後次の本文とみなすようになり、評価が不安定な時期があった。その中で極めて厳密、精細な本文対照を行って、いわゆる「覚一系諸本周辺本文」は覚一本以降の混態本文であることを証明したのが千明守氏であった。伝本の類別は、同一群に属する伝本に共通する本文的特徴を指標とするのが一般的であるが、千明氏は、覚一系諸本周辺本文には、すべての伝本に共通する本文的特徴はなく、覚一本的本文と屋代本本文との「混態」という生成要因を指標としてグループ化されている、と指摘した。『平家物語』



の諸本分類において、明確に意識されてこなかった点を指摘した意義は大きい。このグループの諸本が覚一本と屋代本の中間的性格をもつことと過渡的形態をもつこととは同義ではなく、じつは覚一本の本文に屋代本の本文を取り込んで作成された、むしろ後出性のつよい本文であるという本書第一篇の結論はほぼ定説として認められ、今後も『平家物語』本文研究ではその位置を失わないものと思われる。ただ、軍記物語研究ではしばしば用いられてきた方法ではあるが、実在しない写本（原本）の存在を想定する仮説は、ここまでに進められてきた客観的、科学的研究手法と乖離する懸念がないわけではない。この後はこれらのグループの諸本がいつ頃、何を目的として改編されたのか、巻ごとに改編の様相が異なるのはなぜか、という大きな問題が残されている。千明説をふまえ、覚一本の先行形態をさぐる試みもなされており、千明氏自身の手によっても、屋代本、覚一本の生成過程を解明することが期待される。

第二篇では、昭和三〇年代に覚一本以前の初期『平家物語』の文芸性を論じる

テキストとしても用いられるようになっていた屋代本の、「古態性」の証明に疑問を呈し、古態とは何か、語り本系『平家物語』の初期形態はいかなるものであったのか等々の、根本的にかつ現在もなお解決されていない大きな問題に取り組んでいる。軍記物語研究における「古態性」という概念は、頻用されるにも拘わらず客観的な指標としては曖昧な面があり、文脈の一貫性という、やや主観的になりがちな角度から先出性、古態性を証明しようとする異論の余地が残ることは避けられない。本書の刊行を契機に議論が繰り返されて、『平家物語』の成立論に新たな展開をもたらすことを期待したい。

本書は屋代本や覚一本という語り本系本文の基底に、読み本系の延慶本のような記事量の多い本文が控えていることを明らかにした。口頭試問での質疑を通して、第二章、第三章でとりあげられている小督譚や平家都落ちにおける章句を、延慶本のみならず、他の読み本系本文（長門本や四部合戦状本など）をもふまえて検討すると、語り本系本文の生成過程をより一層緻密に跡づけ得る可能性のあ

ることも示された。最近では千明説をふまえた「屋代本の形成過程」を扱う論文も出てきているが、屋代本の本文研究はまだまだ手薄であり、どのような要請・事情により、延慶本などにくらべて簡略な十二巻形態の本文が生まれてきたのか、という未解明の課題に答えていくことが望まれる。

また屋代本は、語り本系の二大グループである一方・八坂両系統の本文にまたがる性格を有しており、八坂系諸本、延いては語り本系本文全体の形成を究明するためにもその位置づけが必要であった。本書は屋代本の位置づけを通して、従来、琵琶法師の語りの相違によって分岐したかのように誤解されてきた一方・八坂両系の本文流動は、机上の編集作業が大きな要因であったことを明らかにした。しかし、語りの事情が本文にまったく影響を与えていないのかどうかということ、逆に語られた本文とされる流布本には印刷出版、商品としての普及という一面があることもこれから考慮されねばなるまい。

なお序章で本書全体の理論的支柱となる本文批判の方法論を確認するために、

池田龜鑑博士の提唱した国文学研究における系譜法的研究法の研究史を祖述し、その方法の限界と可能性について論究し、自らの研究方法を明示した点は重要である。しかし、池田博士の系譜法的研究法は、貫之自筆本とされる『土左日記』が現存するという、歴史的実在性が確認できる写本をもとに構築された文献学的方法論である。この方法論を語り本『平家物語』、即ち流動的本文の研究に適用することに疑義を唱えた小西甚一氏の提言を、従来の『平家物語』研究は十分に受け止めてきたとはいいい難い。これまでの『平家物語』本文研究の積み重ねをふまえて、小西提言の趣意を生かした、新たな理論構築を行う必要がある、千明氏の課題はまさにそこにある。今後の実践的本文批判に期待するところは大きい。

以上、今後の学界に提供できる将来的課題の重要性をも含めて、本論文の提出者千明守氏は博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと判断される。

平成二十五年三月十二日

主查	國學院大學教授	松尾 葦江	印
副查	國學院大學教授	針本 正行	印
副查	愛知教育大學教授	今井 正之助	印